
バースディ・プレゼント AnotherStory

まなつか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バースデイ・プレゼント Another Story

【Nコード】

N46800

【作者名】

まなつか

【あらすじ】

中学二年生の佐野悠平は独りぼっちだった。ただ、そんな彼は恋をする。その相手を守るため、彼は命を賭けた。

（前書き）

『バースデイ・プレゼント』のもう一つの話です。
先にそちらを読むことを推奨します。

<http://ncode.syosetu.com/n36480/>

「ただいま」

僕は誰もいない家にそうつぶやく。

ふと一年前を思い出す。僕が帰ってくると弟の御津也が必ずおかえりと迎えに来てくれていた。

「はあ…」

短くため息をついた。室内とはいえ、もう冬だ。白い息が出る。

僕は佐野悠平。中学一年生だ。小学生の頃、親が離婚してその後、母さんが死んだ。事故死だ。そしてその母さんが死んだ翌年、御津也は母さんを追うようにして、死んだ。こっちは事故ではなく肺炎だった。

それで、僕は独りぼっちになった。

だけど、今は違う。美沙さんがいた。今日の部活のとき、今度家で誕生会することになった。今日知ったことだが、美沙さんと僕は誕生日が同じ日なのだ。…長岡先輩もそんなことを言っていたけど。

とりあえず、独りでいる寂しさが紛れる感じがした。

僕は夕食の準備をする。…といっても、帰りにスーパーの惣菜を買ってきたのを出すだけだった。僕は電子レンジを使うのが面倒に感じ、温めずから揚げを口に頬張った。冷たかった。そして、次の野菜炒めを出しながら去年の誕生日のことを思い出していた。

「ただいま。御津也」

「おかえり！にーちゃん」

奥から二つ年下の弟が出てくる。腕まくりをしていることからお

風呂掃除をしていたのだろうか。

母さんが死んでからは家事は全部僕ら兄弟でやっていた。親戚や近所の人の手は借りたくなかったのだ。

僕は靴をそろえて脱ぎ、かばんをそこらへんに放り投げた。

「なあ、今日が何の日か知ってる？」

僕は御津也に尋ねた。

「え？あ、ああ。ぼげもんの日でしょ？今週はガチヨウ団と戦うんだよね」

「はあ…。あんな…」

今日は僕の誕生日なんだぞ。と言おうとしたが、御津也にさえぎられた。

「おめでと。お誕生日」

御津也はにつこりと笑ってそういった。冬の西日が玄関に差し込んできて僕らを暖めているようだった。

「…ありがとう」

その言葉が一番聞きたくて、心に染み込

僕は台所へと向かう。別に誕生日だからって贅沢はしない。蓄えが少ないのだ。

今日は野菜炒めだ。僕が作った料理を御津也は文句一つ言わずにおいしいと食べてくれる。

誕生日だけど、いつもと変わらない、平凡な夕食だった。

僕は野菜炒めを食べ終えた。パックをゴミ箱に入れると宿題を始めた。

ふと窓から外を見る。もう真っ暗だった。

次の日の放課後。僕は文具店に行った。美沙さんの誕生日プレゼントを買ったためだ。

僕は迷った。今まで人にプレゼントなんてあげたことが無かったからだ。ペン売り場の前であれこれ悩む。

そして、一時間がたった頃。

「あの、これください」

僕は二本のかわいいと思ったペンを買った。

「八百四十円になります」

レジのお兄さんがやれやれ、やっと決めたかというような感じでそう言った。

僕は財布を開けてその金額ぴったりのお金を出す。

今晚の夕食は抜きだな。

そして、誕生日の十二月十二日。

僕は家中を掃除していた。午後には美沙さんが来るからだ。

「そうだ、部屋も暖めておかないと……」

普段使わない石油ストーブを出して焚いた。少しずつ暖かくなっていた。

掃除をしていると結構いろいろ出てくるものだ。

昔、御津也と遊んだスーパースポール。母さんがよく聴いていたCD。

僕はそれらをそつと大切にたんすの中へしまった。

午後二時七分。

掃除も終わり、温かいお茶を入れて飲んでいる最中だった。インターフォンがピンポンと鳴った。

「はい」

「中里ですー」

「はい」

とうとうきた。僕はドアを開ける。美沙さんが立っていた。

「どうぞ。入ってください」

「ありがとう」

僕は彼女を招き入れた。そして僕は自分の部屋まで案内した。

「こっちにどうぞ。僕、飲み物を取ってきますね」

僕はそういうと台所へと向かった。

「さて、どうしようか…」

僕はこれからのことについてジュースをコップに注ぎながら考えた。まず、ジュースを持っていく。うん。そしてお祝いの言葉を言う。うんうん。そして実は自分も誕生日でして…とか言う。うんうんうん！そして打ち溶け合っていくうちにいい雰囲気！うおお！そして告白！KISS！

俺はそこまで考えるとちょうどコップがジュースで満たされていたので再び部屋へ向かった。

ドアを開けると、当たり前だが美沙さんがいた。

「どうぞ」

僕はコップを彼女に差し出す。

「ありがとう」

彼女はそういつて受け取り一口口につけた。

「……」

さて、これからどうしようか…。そうだ。まずは祝いの言葉を…。「美沙さん…今日は誕生日、おめでとunggございます。その…僕、プレゼントを用意しました。これ…どうぞ」

僕は机の引き出しを開けると前に買ってきたきれいにラッピングしたペンを取り出し、美沙さんに差し出した。彼女はうれしそうに、

「わあ！ありがとう！…開けてもいいかな？」

と言ってきた。僕はその笑顔が見れて幸せだった。死して一片の悔い無し。

「いいですよ」

彼女は紙包みを剥がし始めた。ときどきする。どうしよう。喜んでももらえなかったら…。

「これ…」

美沙さんは不思議そうにペンを見ている。

「美沙さんがほしいと言っていたので…」

どうしよう。あまり気に入ってもらえなかったのか…？

「気に入ってもらえましたか？」

反応は、ない。というかみるみる顔が険しくなってくる。

そこで僕はやっと気づく。美沙さんが欲しいといったのは長岡先輩に言ったんだ。だから、彼女は彼からもらうのに期待していたのだ。それなのに、僕が勝手な思い込みで…。

僕はどんどん落ち込んでいった。最悪だ。もうだめだ。

そして美沙さんは、

「ごめん、悠平。私急用思い出したから…帰るね。ごめん」

そう言って立ち上がった。

もう僕は彼女が何処へ行くのかはわかる。

「わかりました。行ってきた下さい。がんばって」

精一杯、励ましの言葉を送った。

「え…」

彼女は一瞬面食らった顔をしたが、それどころではないというように出て行った。

「…はあ」

彼女が残していったコップ…そして、一時間近く悩んで買ったペン。それだけが虚しく、残っていた。

「……うう……」

悲しかった。今日は僕の誕生日だ。僕は誰からも祝われないんだ。寂しかった。今日は僕の産まれた日だ。それなのに独りだ。

僕は心行くまで泣いた。大声で。そう　悲しみも寂しさもすべて忘れてしまうほどに　。

そして、日が沈み始める頃。僕は散歩がしなくなった。

部屋をそのままにして、外に出た。ドアに鍵を閉める。

「…はあ」

心が重たかった。美沙さんはもう長岡先輩と会えただろうか。

僕は公園のほうへと向かって歩き出した。

すると、驚いたことに公園には美沙さんがいた。

心臓が高く、跳ね上がる。

塀に隠れて観察をする。一人のところを見ると、まだ見つからないようだ。

僕はそのまま公園から離れることにした。

と、そのとき。

「!？」

公園の茂みの奥で何か動いた。

もう一度そこら辺をよく見てみる。いた。黒いジャンパーを着た男だ。

「一体、何をして　　?!」

奴はナイフを持っていた。そう、あいつは最近目撃されていた不審者だ。そして奴は美沙さんを狙っている。美沙さんは公園から走って出て行くところだった。それに付いていくように奴も出ようと茂みからでる。

「おい!お前!」

「!？」

僕は奴に声をかける。

「美沙さんに何をするつもりだ？」

「……」

奴は人がいたことに対してなのか面食らった顔をしている。

「彼女に手を出したら、僕が許さない」

「なぜだ。お前はあいつの恋人か？」

奴は観念したのか普通に話してきた。

「違う」

僕は否定した。僕は美沙さんの友達だ。そう。友達、またはそれ以下。

「ふん」

奴は鼻で笑う。

「どうするつもりだ?お前。俺に殺されっぞ」

「ああ…。別にいいよ。僕はもうだって。彼女が傷つかないなら」

僕は自身を持ってそう言った。命なんて惜しくない。僕に失うものなんてもう、何も無いのだから。

「俺はお前に顔を見られた。だけど、それだけで人を殺めたくはない」

「じゃあ、なんでお前はナイフなんて持ってる」

「脅しだよ。おどし」

「ちっ」

僕は頭に血が昇った。奴に向かって走っていった。

「なっ　ッ!？」

僕は奴に体を思い切りぶつける。奴は大きく倒れこんだ。そして、奴の手からナイフが離れる。

ナイフは宙を飛ぶ。

それは回転しながら、重力に従い、やがては下に落ちる。

そして、その落ちる先は

「う……ぐっ……」

僕はうめき声をあげる。背中に激痛が走る。

「う……うわぁ……!」

奴は怯えた表情で僕を見て、起き上がり、駆けて行ってしまった。

「ぐっ……うっ……」

僕は意識が遠のく前に小さく、こうつぶやいた。

『Happy Birthday』

僕の最期の、彼女への言葉だった。

（後書き）

こんにちは。まなつかです。

この文章を打つのは二回目になります。

なんか、エラーがでてしまっ…。

今回は、前作の伏線回収回です。

本当は予定がなかったのですが、前作を読み直していると、

「あれ…？ここ、伏線？」

とか作者が思っ…てはいけ…ないことを思っ…てしまったため、書きま…した。

そして、結末に

「まなつか…お前…」

とか思われた方もいるのでは。

ええ、バッドエンド、好きです。

でも、彼は大切な人を守れたと思っ…ているのでいいでしょう。
あるいみ、ハッピーエンドです。

それで、次回予告です。

『夏ノ風』はまだ書いている最中です。すみません。

それで、タイトルは『雨ノ日』です。

名前が似ていますが、関係はありません。

ちなみにハッピーエンドです。（予定）

（予定） 重要

その作品については、『雨ノ日』のあとがきにて。

これから「前編」をアップします。

しばしお待ちを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4680o/>

バースディ・プレゼント AnotherStory

2010年10月23日14時40分発行